

魯迅とアーサー・スミス、安岡秀夫の中国国民性に関する語録の比較研究⁽¹⁾ (上)

范伯群 澤谷敏行 原著

澤谷敏行 徐志紅 訳

第一章

魯迅は高度の歴史使命感と国民としての愛国責任感に基づき、「過ちを聞かば則ち喜ぶ」という謙虚な態度を持って、外国人による自国民のひねくれた国民性への批判を受け入れていた。A・H・スミス（以下スミスと略す）、安岡秀夫及び内山完造の三人が出した中国観察の結論に対する魯迅の評価は異なるものであった。彼はスミスの意見を比較的重視し、安岡秀夫の著作は基本的にスミスの影響を受けて出されたもので自分の発見が少ないと評価した。中でも内山説への評価が最も低かった。内山の中国人の長所を多く挙げるやり方について、魯迅は「その一つは支那の優點らしいものをあまりにも多く話す趣きがあるのでそれは自分の考へと反対するのである。（これはわたしの意見と相反するものである。）」とはっきり異議を唱えた⁽²⁾。中国の国民はもともと「事大（自分の信念を持たず勢力の強いものに追随する）」だけでなく、「自大（独りよがりであぬばれ屋）」である。長所を多く並べる内山のやり方では正に火に油を注ぐようなもので、その著書を読んだ中国人をますます思い上がらせる。そのため、魯迅は感嘆の意を込めて「それは自分の考へと反対するのである。」と言った。内山に著書の序言を依頼された魯迅は「メンツ」に束縛され（メンツを重んじる国民性は魯迅にも見られる）、序言を書くことは書いたが、婉曲的に自分の意見を述べた。

スミスは中国現地で直接的に得た生の資料を持っていた。彼の著書はある「有望な青年」に影響を与えた。その青年は当時日本で留学していた周樹人である。祖国の運命と国民の前途への模索を続けていた魯迅は国民性を改造したいという大志を抱いていた。そんな彼が日本留学時スミスの日本語版『支那人気質』（1896年、即ち明治29年博文館出版、羽化・渋江保訳）を手

入れた時は鬼の首を取ったようであったと想像できよう。魯迅は若いころスミスのこの本の影響を受けていた。

中国人による魯迅研究を振り返ってみれば、最初は魯迅を「偉人」として、「民族英雄」として彼の高尚な人徳を敬い慕っていた。「四人組」政権が打ち砕かれた後は魯迅を神棚から下ろし、比較的対等の目線で彼を「ひとりの人間」として研究するようになった。しかし、私たちはさらに「成長期の魯迅」を研究する必要があると思う。若いころに彼がどんな本を読んだか、どんなことをしたか、どんな世界を見てきたのか、またそれらのことによって彼はどんな感想を抱き、どれだけの見聞を広めたか、そういったことを研究して初めてひとりの青年が「成長」して「有名人」、偉人、あるいは民族的英雄になったかが分かってくる。例えば、彼がスミスの『支那人気質』を読んで、その内容を自分の見聞と照らし合わせ、中国人の重要な国民性を構成するキーポイントは、「体面」であるということの理解をさらに深めた。スミスの本のすべての内容で最も素晴らしい論述は、中国人は「メンツ」が命であるとみるところにある。

（中国人からすれば）、大切なのは事実ではなく、常に形式なのだ。適時に適切な方法で立派な口上を述べることであれば、彼らの演劇の目的は達せられる。我々はその舞台裏を覗くべきではない。そんなことをすれば演劇は台無しになってしまう。それは世界のあらゆる演劇と同様だ。彼らの人生における複雑な人間関係において、こうした芝居をうまく演じることこそが＜面子＞を保つ手段となる。芝居がうまくできないこと、無視されること、演じる途中で挫折することは＜面子を失う＞ことなのだ。それさえ正しく理解すれば、＜面子＞というものが、中国人の多くの重要な性格の複雑な錠前を開ける一つの鍵であることがわかるだろう。⁽³⁾

上はスミスの研究結果を引用したものであり、彼の素晴らしい貢献である。一般の人は、目に見える錠前でも簡単に開けられないのに、スミスは研究によって、秘密の鍵穴を見つけた上に、それを開ける鍵まで作った。すばらし

い発見である。魯迅はずっとこの「発見」の価値を認めていた。1934年10月4日、魯迅は「説『面子』」（メンツについて）という文を発表し、それを通してスミスの論点の深さと正確さを再度認めた。

「メンツ」は我々が会話のとき、よく聞く言葉だ。聴けば、すぐにわかるらしいから、この言葉についてくわしく考えた人は、多分、あまりいないであろう。だが、最近、外国人の口からも、ときどき、この言葉を聴いた。彼らは研究しているらしい。彼らは、「メンツ」ということは、なかなか理解しにくい、これは中国精神の要綱であって、これさえ把握しておけば、二十四年前に辮髪をつかんだのと同じように、全身がひかれるままに動くと考えている。伝聞によると、清朝時代、外人が総理衙門に行き、ある種の要求をつきつけて威嚇すると、びっくりした大官たちは、万事言いなりに承諾したが、退出のときは、脇の門から送り出された。正門を通らせなかったことは、その外人のメンツが失われたことになる。外人のメンツがなくなった以上、おのずから中国はメンツが立ったのであり、上手に出られたのである。これは事実か否か、わたしは断定できないが、この話は「内外の人士」の間ではかなり知られていた。それで、わたしは、彼らが我々の「メンツ」を立てることばかりしてはいないかとかなり疑っている。⁽⁴⁾

いわゆる「『メンツ』を立てることばかりしてはいないか」というのは、つまり、外国人は「メンツを与える」ことによって中国における実利を盗み取ろうとしていた。上記の文章では、魯迅は高官とお金持ちの娘婿がメンツを重んずることを指摘しただけでなく、さらに人力車の車夫がメンツを重んじた例を挙げた。両者のメンツ重視にはただ表現形式の差が見られるのみである。ここからわかるように、貧富差や階級差とは関係なく、中国人であれば皆このようなメンツ好きの欠点がある。つまり、これが中国人の「国民性」である。(1927年以降、魯迅は公認の「階級論」学者として扱われるようになったものの、1934年に書かれたこの「説『面子』」（メンツについて）という文章は、「階級的観点」ではなく、一貫して国民の性質から論を組み立てた

ものである。) 1934 年 10 月時点のみではなく、逝去する 14 日前に発表された『「立此存照」(三)』(「これを証拠に」(三)) という文からも魯迅が身体の衰弱中にもかかわらず、スミスの『支那人気質』⁽⁵⁾をいつも心にかけて忘れなかったことがわかる。

わたしは、いまでも誰かがスミスの『支那人の気質』を翻訳してくれないかと希望している。そういう書物を見て、自ら検討し、分析し、その正しい点はどこなのか、はっきりさせ、変革し、抗争し自ら努力をつみかさねて、他人の寛容と賞賛を求めないこと、それが、中国人とは本当はどういう存在であるか証明する行動である。⁽⁶⁾

以上からわかるように、若き頃の日本留学時代から 1936 年に亡くなるまで、魯迅は一生涯スミスのこの作品が消えることなく印象に残った。何故忘れられなかったかという、それはスミスの論断が中国人に警鐘を鳴らしたからだと魯迅は悟っていたからである。もし中国人がこのひねくれ根性(劣った性格)を改めなければ、小さな視点から見れば中国人が個人の「体面」ばかり気にし、真実を見つめないままになり、大きな視点から見れば「メンツ」のために民族の利益を損なうことにもなりかねない。

私が出会った外国人には Smith の影響を受けたのか、それとも自身の実体験から出たのかよくわからないが、中国人のいわゆる「体面」「面子」(ミエヌツ)を特に研究している人がかなりいる。しかし、私が思うのだが、実は、彼らはとっくにそれを会得済みであり、実際には適用もしている。そのうえ、さらに、これを深くきわめて、円熟したものにすれば、外交上の勝利は言わずもがな、さらに上等「支那人」から交換をも手に入れることだろう。そのときは、「支那人」の三文字すら口に出さず、「華人」と言い換えるにちがいない。なぜなら、これも「華人」の体面に関わるからだ。⁽⁷⁾

外国人が中国人に迎合する戦術を採っていたことは魯迅にはわかった。あ

なた達中国人は「メンツ」を立ててほしいのだろう。それでは、「メンツ」を丁重に立ててあげようではないか。その代わりに、実利——外交上の利益を含めて——我々がいただこう。互いに交換しよう。そこで、中国の一部の外交官たちは外国人から空のメンツを「贈呈」してもらう代わりに、お礼として外国人に「外交上の勝利」を「喜んで」「進呈」した。スミスによって上記の「秘訣」（奥の手）が暴かれたと魯迅は思った。彼は自分の作品を通して、中国人が外国人によるこういった「インチキ」を見破るよう注意を促した。中国人が自分自身の短所を改善する一方、警戒心を持つように呼びかけた。いったん外国人が「メンツ」に砂糖を塗って砲弾を作り、中国人を倒そうとしてきても、決して外国人に打倒されないように用心しておくべきだと。

魯迅はスミスの「メンツ」論にひどく感心した以外、スミスのほかの論にも影響を受けたことはその親友許寿裳の回想録から窺える。例えば、スミスは第三章「支那流の勤勉」（勤勉）の最後の部分で次のように述べた。

「勤勉な人の手は富をもたらす」というソロモン王の箴言が正しければ、中国人は地上で最も富んだ国民の一つになるはずだ。そしてもし、彼らに明らかに欠如している正直と誠実という基本的な人として持つべき徳を、他の徳と同程度に備えることができるならば、間違いなく彼らは繁栄するだろう。しかし、彼らがいかに＜五常＞（人が常に抱くべき五徳：仁・義・礼・智・信）を列挙しようとも、正直と誠実という徳の欠如は＜常態化＞している。これらの徳が、どのような手段であれ、中国人の道德観の中の本来あるべき位置に備えられたなら、その時にこそ、彼らの比類のない勤勉さは十分な報奨を手に入れるであろう。⁽⁸⁾

青年留学生としての魯迅はスミスの上記の論点を受け入れたのである。この論点は「メンツ」とも当然かわりがある。「メンツ」のために中国人はもちろん「芝居する」ことが上手である。芝居をやるなら「大げさになる」のが当たり前である、だから必然的に「誠」（真実）に欠ける。

1902年魯迅が日本留学していた頃⁽⁹⁾、彼はよく同郷の親友許寿裳と一緒に

に中国の国民性改造の問題について議論していた。許寿裳の回想録ではつぎのようなことが書かれていた。

ある日、歴史上、特に異民族の奴隷とされていた頃の中国人の命はいかに価値がなかったかについて話し合っていたら、互いに悲しみにうちひしがれた。その後、わたしたちはいっそう仲良くなった。会うたびにいつも中国人の民族性の欠点について話した。異国に身を置くわたしたちのショックは多岐にわたっていた。……わたしたちはたびたび三つの関連する問題を話し合った。(一)理想的な人間性とはどんなものなのか。(二)中国民族に最も欠けているものは何か。(三)その根底にある原因は何か。(一)は古今東西の哲人たちがたゆまず研究してきたもので、おびただしい学説がある。わたしたちは良いとする説に従い、多くは話さなかった。(二)についての探究であるが、中国民族が最も欠けているものは「誠」と「愛」であると当時わたしたちは考えていた。つまり、わたしたちの民族は「詐偽無恥」(偽り恥知らず)と「猜疑相賊」(疑い互いに傷つける)の病にかかったのである。スローガンは聞こえがよい、標語や宣言も見た目がよい、書籍は美しい言葉で飾り立てられて吹聴している。しかし、実際の状況は全く違うのだ。(三)の問題点は歴史上に遡って探究すべきである。原因は多いけれど、二度に亘って異民族の奴隷にされたことが一番の原因だと考えられる。奴隷となった人が「誠」や「愛」についてどうして語ることができようか。……唯一の救済方法は革命である。わたしたちは会うたびに時間を忘れて話に耽った。私はその時から彼のずば抜けた理想と着眼点の遠大さに感心していた。彼がその後医学を志したのも、またきっぱり医学をやめ文学に身を投じる決意をしたのもすべてここから始まったのである。⁽¹⁰⁾

許寿裳が上記の文で言及した「詐偽無恥」(偽り恥知らず)と「猜疑相賊」(疑い互いに傷つける)の二点はスミスの同著作の幾つかの章で議論されていた。例えば第四章の「礼儀」、第八章「婉曲表現の才能」、第二十四章「相互不信」……ではこの二つのひねくれた根性(劣った性格)についてつぎの

ように述べた。

西洋人が、中国人の礼儀を正しく理解することは難しいのは、「礼儀とは、真心から示される好意である」という定義が、我々の心に染みついているところにある。……

……礼儀は、空気枕に喩えられてきた。空気枕も礼儀も、中身は何もないが、ショックをかなり和らげることができるからだ。⁽¹¹⁾

悪い知らせはできるだけ長い間知らせたくない、そして偽った形で伝えたい、と望むのは、中国人も他の民族と同じだ。だが中国人の場合は、＜礼儀＞の観点から、我々にとっては驚きでもあり無意味だと感じるほどにまで、その偽装は遂行される。⁽¹²⁾

＜竹＞ほど、中国人を的確に喩えられるものはないだろう。＜竹＞は優美で、役に立たないところはなく、しなやかで、中が空洞だ。東風が吹くと西にたなびき、西風が吹くと東にたなびく。風が吹かなければ、全く曲がらない。⁽¹³⁾

子供たちが独り立ちする年齢に達すると、知らない人を盲信しないように、と言いつつ含めておかねばならないと気付く。ところが中国人には、こうした警告は年少者であろうとも不要である。それは、母親の母乳の中に含まれているからだ。中国には「一人で寺に入るな。二人で井戸を覗くな」という諺がある。我々は驚いて尋ねる。なぜ一人でお寺の境内に入ってはいけないのか。それはなんと、僧侶がその機会を捉えて彼を殺してしまうかもしれないからなのだ！また、なぜ二人で一緒に井戸を覗き込んではいけないのか。それは、もし彼らの一方が他方に借金をしているなら、あるいは一方の欲しい物を他方が持っているなら、一方の者はこの機会を捉えて他方を井戸の中に突き落としてしまうかもしれないからなのだ！⁽¹⁴⁾

中国人は平常の会話において、嘘とまでは言えなくても真実を述べていない。したがって、真実を知るのは大変困難なことが多い。中国にあっては、この世で最も手に入れ難いものは真実である。…

……中国人は長時間をおしゃべりしても、実質的には何も言っていない

いに等しいことが往々にしてある。このことは、前章で述べた猜疑心と、それに結びついた誠意の欠如によるものと説明することができる。外国人にとって中国人が不可解なのは、多くの場合、中国人に誠意がないことに起因している。⁽¹⁵⁾

以上長々と引用したスミス『支那人気質』の記述にかなり辛辣で厳しい言葉も含まれている。一部の中国人はそれを聞いてとても不満に思うだろう。だが、魯迅は平然としてそれらの言葉を「食べて」、「消化」してさらに鋭い文章を多く書いた。魯迅のある名言を思い出した。彼は外国の火で自分の肉を煮込むことに慣れていて、自分の肉を煮込むことはつらいだろう。この自分の肉を煮込むという比喩は「容赦のない厳しい自己批判」を例えるものである。これぞ中国の気概であり、脊椎をなすものである。

そのほか、青年時代の魯迅の洞察力に満ちた考えを全てスミスの影響を受けたものと見るのは不適切である。「英雄所見略同」（傑出した人物の見解はだいたい一致する）」という中国のことわざを用いて両者の関係を表したほうが良いだろう。一方、魯迅が若いころスミスの『支那人気質』から示唆を得たこと、また老人になるまでこの本が中国人に役立つといつも心にかけて忘れずにいたことは揺るぎない事実である。

つぎは安岡秀夫の著作を見てみよう。これも特色ある著書である。実はスミスはこの特色に気づいたが、それをやらなかった。しかし、安岡秀夫はやり遂げた。スミスは次のように述べている。

中国人との関わりが現状のようであれば、彼らの社会生活についてなんらかの知識を得るには三つの方法があると言われている。すなわち、彼らの小説、民謡、演劇の調査である。これらの情報源はもちろん重要だ。⁽¹⁶⁾

突飛な発想で申し訳ないが、ひょっとして安岡秀夫は上記の文に刺激されて『小説から見た支那の民族性』⁽¹⁷⁾を書いたのではと考えた。残念ながらそれについての証拠はない。安岡秀夫は中国の小説と劇作をたくさん読まれ

た漢学者であることは否めない。それなりの蘊蓄がなければスミスのこの提案を知っていてもなすすべがなかろう。スミスも二十二年に亘る豊富な中国滞在経験、そして大量の実例を注意深く観察していなければ、『支那人気質』という本は書けなかったはずである。ただ、安岡秀夫よりもスミスが考えを練り、まとめることに長じていたことはうなずける。そのため、魯迅は一度のみならず安岡秀夫がスミスの影響を受けたと指摘した。

彼（安岡）は、「Smith の“*Chinese Characteristics*”にかなり信頼をおいているらしく、頻繁に援用している。この本は、日本では二十年前に、『支那人気質』という題名で訳書が出ているが、中国人である我々は、あまりそれに関心を示さなかった。第一章でSmithが言っていることは、支那人はどうも芝居気の多い民族で、精神が少し高ぶると、役者のように一字一句、一挙手一投足が大げさになるが、本音が出ているというよりも、無理にその場をとりつくろっていることの方が多い。これは、あまり体面を重んじ、なんとか自分の体面を十全に保とうとして、あえてこうした言葉、動作をとるようになる。要するに、支那人の国民性をないまぜに形成している重要なかなめは、つまりこの「体面」なのである」と。(18)

安岡秀夫がスミスの影響を受けたことを説明するために、魯迅はスミスの重要論点をもう一度繰り返した。「頻繁に援用している」という魯迅の考えを実証するものとしてつぎのような点が挙げられよう。『小説から見た支那の民族性』の中に、スミスに言及した部分またはスミスの話を引用した部分は計8カ所もある（「総説」に1カ所、第二章に3カ所、第四章に2カ所、第五章に1カ所、第八章に1カ所）。『支那人気質』（『中国人的性格』）と『小説から見た支那の民族性』という二書の目次を比較してみれば、「明治時代の支那研究の結論は大抵英国の何とか云う人が書いた『支那人の気質』の結論に影響を受けたもの……」(19)という魯迅の下した結論が間違っていないことがわかる。魯迅は「小説から民族性を見るというのも、なかなかよいテーマだ」(20)と認めていた一方、テーマはよいが、発見の鋭さにかけてはスミ

スに及ばないとも思っていたようである。よって、魯迅は日本人による中国の民族性研究の論著にあまり心が動かされなかった。

『小説から見た支那の民族性』は、……その中に、いくつか要点を衝いたものがありますが、むりにこじつけたものも多く、読んでも失笑させられます。……要するに、日本は今、新しい「支那通」が発生していますが、しかしまだ「通」はいず、中国の弱点を攻撃するものに至っては、今までも、たぶんスミスの『中国人気質』を種本にしています。この本は四十年前にあちらでは訳本もあって、日本人の著作にくらべて良いもので、訳して中国人に読ませる価値がまだあるものです。（まちがいいも多いですけども）しかし、英語の本がまだ出ているかどうかわかりません。⁽²¹⁾

安岡秀夫の著書は第一章の「総説」以外、そのほかの幾つかの章は名前からスミスのそれに類似している部分が認められる。例えば、第二章の「過度の対面と儀容を重んじる事」はスミスの「面子」の第一章の影響を受けた。第三章の「運命に安じ物事を諦め易き事」はスミスの第十四章「保守主義」（「柔順の頑固性」中国語版）および第十八章「現状に満足し、楽天的に過ごす」と関係がある。第四章の「気が長くて辛抱強い事」はスミスの第十七章「忍耐力と根気強さ」と相通じている。第五章の「同情心が乏しく残忍性の富む事」はスミスの第二十一章「思いやりの欠如」とつりあいが取れている。第六章の「個人主義と事大主義との事」はスミスの第十三章「公共精神の欠如」と部分的に類似している。第七章の「過度の儉約と不正なる金銭欲の事」はスミスの第二章「儉約」論から影響を受けた。第八章の「虚礼に泥（なず）み虚文に流るゝ事」はスミスの第四章「礼儀」ですでに論じられた。第九章の「迷信の深い事」というのもスミスの第十九章「孝行」と第二十六章「多神論、汎神論、無神論」で論じられた。こう見れば第十章「享楽に耽り淫風（いんふう）盛んなる事」は多く安岡秀夫の発見と言えよう。中国人の「性」に対する考えについて、伝教師のスミスは殆ど触れなかったが、安岡秀夫はそれに気づいた。安岡秀夫にも彼なりの長所があると認めざるをえない。だ

が、魯迅は安岡秀夫の多くの発見に一部道を誤った部分があると特に指摘した。これについては後述にする。

安岡秀夫を低く評価する気はない。上述では彼の長所を認めた。この長所はスミスさえ持っていないものである。しかし、全体を考察したところ、彼の幾つかの重要論点に関しては彼の創造性というよりも模倣性の部分が多いと言わざるを得ない。この結論は恐らく実態とさほどかけ離れていないと思われる。

第二章

中国における魯迅研究の権威者である唐弢氏のはかつて次のように述べたことがある。魯迅が小説『狂人日記』、『阿Q正伝』、『薬』、『孔乙己』、『高先生』、『石罅』、『白光』、『酒樓にて』、『孤独者』、『傷逝』、『兄弟』及び二百万字近くある短い雑文を書いたが、その何れも異なる視点から中国人の性格、中国人の精神世界を描いたものであると。その言葉から示唆を受け、魯迅の作品とスミスの『支那人気質』という良いテーマが思い浮かんだ。だが、比較の対象として挙げられる例が多すぎるので、その中から選ばなければならない主な比較論点を次に並べておく。

スミスは『支那人気質』（『中国人的性格』）で次のように述べた。

彼らに、そうした宗教的日課を行う理由を尋ねみれば、大抵次の二つの返事が返ってくる。一つは「神々との交わりの儀式は古代から伝えられてきたものだ、だからこそ基本的な日課としてしっかりと行なわなければならない」であり、もう一つは「<誰もが>やっている、だから私もやらねばならない」である。中国では機械が歯車を動かすのであって、歯車が機械を動かすのではない。これがいついかなるところでも真実であり続ける間は、見かけ上服従することだけが求められるのだ。⁽²²⁾

上記の文章を読んで魯迅の『狂人日記』（四）に書かれたシーンと言葉を一部連想できる。例えば、兄による弟への支配を示す一文「ぐるになっておれを食う人間が、おれの兄貴なのだ！」⁽²³⁾。また『狂人日記』（八）に書か

れた「从来如此、便対么？」（昔からそうだったのなら、正しいか）」⁽²⁴⁾ という詰問にあるこの「从来如此」（昔からそうだった）は、上記のスミスの文に見られる「历来如此」「古代から伝えられてきたものだ、だから・・・」ではないか。

スミスの『支那人気質』を読んでいると、痩せ細った阿Qを思い出さずにいられない。彼の精神勝利法は国民性のメンツの問題に焦点を絞って体现化したものである。一部の中国人は一つもメンツがない時に、自分で自分を騙し屈辱を忘れ、自分で自分にメンツを立てる——そこで「秘密兵器」を発動させる——阿Qが最も自在に使いこなした「精神勝利法」である。いわゆる「精神勝利法」とは、他人からメンツを与えてもらえない場合は自分で自分にメンツを与え、自分で自分を慰めることである。これは魯迅の一大発見である。この一大発見があったからこそ魯迅が阿Qという「永久不滅」の典型的な人物像を創り出すことができたのである。スミスは次のように述べた。

中国人の喧嘩が激しいものとなれば、多少なりとも個人的な中傷なしに終わることなどほとんどあり得ない。……だから、争いが頂点に達した時、中国人は真っ先に相手方の弁髪をつかんで、できるだけ多くの髪の毛を引き抜こうとする。二者だけの喧嘩で双方武器を持っていなければ、その＜喧嘩＞の九割は髪の毛の引き抜き合戦になる。⁽²⁵⁾

外国人が中国語を知らないことに対し、中国人はしばしば優越感を抱く。⁽²⁶⁾

そして子孫を作りたいという願望は、金銭欲に次いで中国人を支配する欲望だ。⁽²⁷⁾

（非常に貧しく無知な運命を背負った何百万もの人々は、）実際大変視野が狭いので、知的混沌は仕方がない。彼らの暮らしぶりは井の中の蛙と同じであり、天空でさえ一片の暗闇のようにしか見えない。そうした人々は、生まれたところから十マイル離れたところに行ったことがないし、……彼らは生存競争の仕方は知っているが、……その生活は二つの部分、すなわち、胃袋と財布から成り立つ。⁽²⁸⁾

上に並べたスミスを読むば、読者が終生忘れられない（『阿Q正伝』第五章）阿Qと小Dの間に繰り広げられた「辮髪（べんぱつ）の取っ組み合い」を思いつく。二人とも片手で相手の辮髪を引っ張りながら片手で自分の辮髪の根元を守った。「そこで勢力均衡の現象が生まれた。四本の手が二つの頭をひっぱり合い、二人とも腰をまげ、銭家の白壁に黒い虹形を映し出すこと、半時間の久しきに及んだ」⁽²⁹⁾。阿Qは外国人に触れる機会がなかったが、村のいくつか呼び方や習慣が城内と異なることで、城内の住民を大いにばかにした。「阿Qの話では、彼が帰ってきたのは、城内の人間への不満にもよるものらしかった。彼らが、『長凳（チャントン）（長椅子）』のことを『条凳（テアオトン）』といい、魚のから揚げに葱の千切りをそえることがそれだったが、……」⁽³⁰⁾。この訳の分からない優越感（ゆうえつかん）は中国語を話せない外国人を見下げる中国人の優越感（ゆうえつかん）のようなものである。スミスは中国人が子孫代々家を継いでいくことを渴望（こくわん）している点を指摘した。阿Qは正にその渴望（こくわん）に駆り立てられ、呉媽（ごま）と跡継ぎ（しよけいぎ）を産む白昼夢（はくちゆむ）に耽（た）った。求愛行動（くあいこうどう）が挫折（さつたつ）した阿Qは、今度は生計問題（せいけいもんだい）に直面（じつま）した。それで「胃袋（いぶくろ）と銭袋（ぜんだい）」の重要性（じゅうじょうせい）を明らかにした。阿Qは城内（じやうちやう）に行き、世間（よこしま）を見たことがあるようだが、新しい知識（ちしき）を拒んだため、知力（ちりき）は混沌（こんとん）としたままであった。阿Qを思わせるような多くの言動（ごんどう）がスミスの著作（さくしやく）にもしばしば見られる。それらの文字（もじ）を読めば、自分がそうしようと思わなくとも魯迅（ろしん）の著作（さくしやく）の阿Q（あーく）を連想（れんさう）するだろう。スミスが中国（ちゆうごく）の農村（じやうそん）で阿Q（あーく）のような農民（じやうみん）をたくさんみたのだろう。そのため、スミスの著作（さくしやく）と魯迅（ろしん）の『阿Q正伝』（あーくしやうでん）とは通（と）じ合（あ）っている部分（ぶん）がある。

スミスの著作（さくしやく）（国民性指摘（こくみんせいしやうさく））は魯迅（ろしん）の小説（せうせき）の代表（だいひょう）的人物（じんぶつ）と通（と）じ合（あ）っているだけでなく、スミスの意見（いけん）は時々魯迅（ろしん）の雑文（ざつぶん）の内容（ないよう）とも共通（きょうつう）している。例えば、第五章（ごしやう）「正確（せうかく）な時間（じかん）の輕視（けいし）」では、スミスがはじめに次のように述べた。

「時は金なり」という意識（いしき）は、我々（われわれ）にとっては第二（だいに）の天性（てんせい）となり、最後の一秒（いっぴよう）も活用（かつよう）しようとするのが普通（ふつう）だ。⁽³¹⁾

スミスが再三（さんさん）言及（げんき）した西洋（せいやう）の格言（ごうげん）について、魯迅（ろしん）は深く共感（きかん）を覚えた上にさらに発展（はつぜん）させた：「アメリカ人は言った。時は金なりと。しかし、わたしは、

時は生命だと思う。他人の時間をいわれなく空しく費やすのは、実は財産をねらい、生命をあやめることと同じである。」⁽³²⁾ スミスは中国人の時間の觀念の欠如には驚き怪しんだ。中国では「庶民は、太陽の高さによって時を知ることによって十分満足している。そして、その太陽の高さは＜旗竿＞の数で示される。曇りの日なら猫の目の瞳孔の大きさによっておおよその時刻を知る。その程度の正確さで、日常生活には十分なのだ。」⁽³³⁾といわれている。

中国の道德規範の中の「孝」もスミスにとっては難解なものであり、よく疑問にあげられる。「二十四孝」に反対するスミスの反論は、魯迅と共通している部分である。スミスは次のように述べている。

『二十四孝』における孝行の手本として最たるものは、漢代に行きた男「郭巨」のことである。彼は大変貧乏であったので、母親と三歳になる子供を養うに十分な食べ物があった。そこで彼が妻に言うには「私たちは大変貧乏なので、母親も十分に養うことができない。子供がいれば、母親の食べ物を減らすことになってしまう。子供を埋めてしまっはどうだろう。子供はまた授かるかもしれないが、万一母親が死んだら、二度と母親を持つことができないのだから。」妻は敢えて彼に反対しなかった。そして、二フィート（約六十センチ）あまり穴を掘ったところ、金の壺が出てきた。壺にはなんと、「天は孝行息子にこれを褒美として与える」と記してあったのだ。もしその金の壺が出てこなかったなら、その子供は生き埋めにされたに違いない。だが孝行の教えによって、その行為はまさしく孝行だと一般にみなされているのだ。＜私妻子＞をすることで、母の命を長らえさせるために子供を殺すことを妨げてはならないのである。

……いかなる地方においても女兒殺しの直接的証拠は実態よりはるかに少ないであろう。だが、母を養うために三歳の子供を生き埋めにすることを孝行の道だと考える国民が、歓迎されない女兒を殺めることの罪の意識を全く持たないであろうことは、彼らの倫理観から言えば疑いない事実と言えよう。⁽³⁴⁾

魯迅は「二十四の孝」の話の中では上述の話が最も反感を持っている話の一つであることを度々口にした。中では最も不可解で、ひいては反感を引き起こしている話は『老萊子が親を楽しませる話』と『郭巨が子を埋める話』の二つ話であると。また魯迅が次のようにも言ったことがある。子どもの頃、「郭巨が子を埋める話」を読んだ後、魯迅は祖母にかなり不満を持ち、彼女を警戒して、祖母がいるからこそ、自身の生存が脅かされていると思った。万が一ある日、父親が（郭巨に倣って）親孝行をしたくなったら、自分が埋められる可能性があるのではと思った。この親孝行の話は、簡単に言えば肉親の関係を仲たがいさせるものである。魯迅はそのために長い文章を書いた。

一方、「でんでん太鼓」で遊んでいる郭巨の子のほうは、これは同情にあたいする。彼が母親の腕に抱かれて嬉しそうに笑っているとき、彼の父親は、彼を埋めようとして穴を掘っているのだ。説明に、「漢の郭巨、家貸し。子あり三歳なり。母嘗（かつ）て食を減じてこれ与う。巨、妻に謂いて曰く、『貧乏にして母を供する能（あた）わず、子また母の食を分かつ。なんぞこの子を埋めざる』と」とあるが、劉向の『孝子伝』のいうところは若干違って、郭巨の家は富んでいたのだが、その財産を彼は全て二人の弟にあたえてしまったとあり、子供も生まれたばかりで、三歳になぞなっていなかったことになっている。もっとも結末はだいたい似ていて、「坑（あな）を掘ること二尺に及び、黄金一釜（ふ）を得たり。上に曰く、天、郭巨に賜う。官も取るを得ず、民も奪うを得ず」とある。

私ははじめこの子のために本当に手に汗をにぎり、黄金一釜が掘り出されるにおよんで、はじめてほっとしたものだった。だが、それ以来、二度と孝子になろうなどとは考えなくなったし、また父が孝子にはしないかと恐れるようになった。あたかも家が左前になっていたときで、両親が家計を心配しているのをいつも耳にしていたうえ、祖母もすっかり年老いていたので、もし父が郭巨の真似をしたら、埋められるのは正に私ではないか。もし本にあるとおりに一釜の黄金が掘り出されれば、それこそめでたしめでたしだが、世の中のことがそうそうまく

いかないことぐらい、子供心におぼろげにわかっていたのである。

……もっとも、あのときはあのときで、私は本当に恐ろしかった。深い穴を掘りあげても黄金があらわれず、「でんでん太鼓」もろとも埋められて土を被せられ、しっかり踏み固められてしまったら、もはや万事休すではないか、と。まさかそんなことにはならないだろうとは思ったものの、私はそれ以来、両親が貧乏暮らしをかこつのを耳にするのが恐ろしく、髪が真っ白になった祖母を見るのが恐ろしく、彼女は私とは両立しない、少なくとも、私の生に何らかの妨げになる人のひとりであると、いつも思っていた。その後、こうした印象は日ごとに薄れはしたものの、彼女が世をさるまで、完全に消えることはなかった。……⁽³⁵⁾

魯迅はスミスと共通した考えがある。つまり、郭巨のような親孝行は「人間性」に反するものである。スミスもまた中国式の親孝行について長い道理を述べている。

それを読んでたいへん感心し、魯迅が言ったつぎのことが理解できた。つまり、中国の国民性の欠点を指摘してくれる外国人は、「我らの肉を食おうとしていない」⁽³⁶⁾、そして我々に迎合する外国人は、逆に親切心からではなく、我々にいつまでも「苦しみ続けさせることであります。」⁽³⁷⁾ という深い含意を持っている。

スミスは下のように述べたことがある。

孝行とは、子孫を残すことにある。とする中国の教えが、種々の弊害の長く続いている原因となっている。その教えは、養うにたる食べ物があるまいが子供を養子に迎えることを強い、早婚を促し、その結果何百万人も人間が極度の貧困の中でかろうじて露命をつなぐこととなるのだ。それは一夫多妻制や蓄妾制の原因となり、必然的に絶えることのない災いをもたらす。そしてその教えは、中国人の人々の真の宗教である祖先崇拜の中に凝縮されている。この祖先崇拜は、その真の意味が正しく理解されたならば、人々をもっと強く束縛するものの一つとなるだろう。前述したイエイツ博士の小論文で指摘されているように、

幾億人もの生きた中国人が、数十億人もの数え切れぬ死者に耐え難い服従を強いられており、「今の世代は過去の世代に鎖でつながれている」のである。祖先崇拜は、既に述べたあの鉛のように重い保守主義の最上の形であり、その保証なのだ。その保守主義から何らかの致命傷を受けることなく、中国が今世紀（十九世紀）最後の四半世紀に直面している全く新しい状況に、中国は適応することができるのだろうか。また、現世の舞台から退いた世代の人々を自らの真の神々と考え続けている中国人が、前進への第一歩を踏み出すことができるのであろうか。⁽³⁸⁾

魯迅の雑文から似たような言論を取り出そうとすれば、たくさんありすぎて、枚挙に遑（いとま）がない。魯迅は生きている人が死んだ人——古い亡霊——のために責任を取ることに強く反感を持っている。彼は一人の「革新」の先鋒である。

新聞紙上の論壇を見ると、「改革反対」の空気はこのうえなく濃厚であり、「祖伝」「先例」「国粹」などなどを車に満載してきて、道路に積みあげ、全ての人家を完全に生き埋めにしようとしています。⁽³⁹⁾

我々のもっかなすべき急務、それは、一に生存、二に衣食、三に発展、だ。もし、この行く手をさえぎる者があれば、古（いにしえ）であろうが今であろうが、人であろうが鬼（き）であろうが、『三墳』、『五典』、百宗千元、天球河図（てんきゅうかと）、金人玉仏、祖伝の丸薬散薬、秘製の膏薬丹薬であろうが、かまうことはない、全部踏み倒すことだ。⁽⁴⁰⁾

混迷した祖先が混迷した子孫をつくる。これはまさしく遺伝の定理である。フランスの G. Le Bon の『民族進化の心理』のなかに、この問題に触れて次のように言っている（原文は忘れたので、今は大意のみをあげる）——「我々の一挙一動は、自主的であるようで、実はたいてい死者の牽制を受けている。我々一代の人間と、これまでの数百代に渡る死者たちを比べたら、数の上でとうていかなうわけがない」……これはほんとうに背筋が寒くなることではないか。だがそれでも私は、この混迷した思想の遺伝の禍が、かの梅毒のごとく百に一つのみぬかれる者もな

いほど猛烈にならぬよう希望する。たとえ、それが梅毒同様であったとしても、今日では六百六号が発見され、肉体上の病気はすでに治療可能となった、私はさらに、七百七号とでも呼ぶべき薬があって、思想上の病気をも治療できるようになることを希望する。実は、この薬はすでに発明されている。それは「科学」という薬である。⁽⁴¹⁾

これまで述べた両者の言論を比較してみれば分かるように、スミスの本は若いころの魯迅に大きな影響を与えた。魯迅はスミスの本を読んで啓発を受けたが、スミスの論述を受け売りせずに、その論述を発展させ、更に創作した。魯迅には魯迅なりの深い考えがあり、魯迅なりの独特さがあった。

スミスの『支那人気質』と魯迅の雑文の関係を論じることになると、他にも例を多く挙げられる。例えば、スミスは第二十三章「連帯責任と法に対する畏敬の念」で次のように述べた。

村の甲長よりも遙か高位にあるのが知県だ。知県は、中国において庶民が関わりを持つ官僚の中でずば抜けて重要な官僚である。彼らは、彼らより地位が低い人々にとっては虎であり、上位の官僚にとっては鼠である。⁽⁴²⁾

これを読めば、魯迅が中国の国民性について論じた次の話を思い出させる。

残念ながら、中国人は羊に対してだけ猛獣の姿であらわれ、そして猛獣に対しては羊の姿であられるので、たとえ猛獣の姿をしていても、卑怯な国民であることにはかわりはない。このままでいけば、おしまいにきまっている。私は思う。中国が救いを得るためには、他のものをつけ加える必要はない。ただ、青年たちがこの二つの性質の昔ながらの用法を逆さにして用いれば、それで充分だ。相手が猛獣のようであれば、猛獣のようにし、相手が羊のようであれば、羊のようにする、のだ。そうすれば、たとえ相手が魔性のものであっても、自分たちの地獄へひきかえすほかはあるまい。⁽⁴³⁾

また、例えば中国では女性が非常に軽視されていた例。1918年7月に書かれた『私の節烈観』は魯迅が日本から帰国した後書いた最初の長い論説文である。この論文では、魯迅は婦女の悲惨な運命のために呼びかけた。一方、スミスも中国の女性問題についても独自の感想を持っている。

著者は、ある中国人の優秀な学者に、比較的多用される女偏を持った百三十五の漢字について調査を依頼した。その結果、<好>や<妙>など良い意味を持つ漢字が十四、悪い意味を持つ漢字が三十五で、残りの八十六文字は意味上良くも悪くもないことが分かった。だが、悪いと分類されたものには、中国語全体の中で最も道義に反する意味を持つ文字が幾つか含まれている。例えば、女偏に盾を意味する旁のついた漢字[奸]は<欺く、不正な、極悪の、裏切り、利己的な>を意味し、女という文字を三つ組み合わせや漢字[姦]は、<密通、姦淫、誘惑、陰謀>を意味する。⁽⁴⁴⁾

スミスの研究は細部に亘っている。「運命」などについての論述にも両者の共通点が見られるが、ここでは省かせていただく。

この章を終わらせようとするところで、スミスと魯迅の一番大きな違いについても論じたい。聖職者としてのスミスから見れば、中国の発展の道は「人格と良心」を持ち、もっと多くの「同情心」を持つことにある。

中国が必要とするものは正義だ。そして中国が正義を獲得するためには、神の存在を認識し、人間についての概念を変革させ、人間と神の関わりを理解することが絶対に必要である。中国は、全ての人々や、家庭や、社会に新しい生き方を必要としている。この時我々は、中国に必要とされる多様なものが、実はただ一つのものであることに気付く。正義を恒久的に完全に実現し得るもの、それはキリスト教文明のみであろう。⁽⁴⁵⁾

それに対して、魯迅は中国の活路は「革命」にあると主張した。——彼は

まず「思想革命」を提唱したが、その後「階級革命」に賛成した。彼の立場は周知の事実であるから、ここで詳説することを省く。（第三章に続く）

【訳注】

<上>

- (1) 范伯群・澤谷敏行「魯迅与スミス、安岡秀夫 关于中国国民性的言论之比较」（『魯迅研究月刊』一九九七年第四期）による。
- (2) 内山完造著『生ける支那の姿』中央公論社 1936 年「序」p.8
- (3) Smith, Arthur Henderson 著“Chinese Characteristics”訳文は石井宗皓、岩崎菜子訳『中国人的性格』中央公論新社 2015 年（以下出版社等省略）第一章「面子」p.18 から引用
- (4) 『魯迅全集』学習研究社 1984 年（以下出版社等省略）第八巻 p.147 「“メンツ”について」から引用
- (5) 中国語は『中国人的気質』となっていたが、前の引用によって改めた。
- (6) 『魯迅全集』第八巻 且介亭雜文編「これを証拠に」（三）p.704
- (7) 『魯迅全集』第四巻「即座支日記」p.369
- (8) 『中国人的性格』第三章「勤勉」p.38
- (9) 魯迅の日本留学は一般には 1904 年とされているが、この回想録によれば 1902 年には実際に東京の学校弘文館にいた。
- (10) 許寿裳著『我所認識的魯迅』『回憶魯迅』1952 年人民文学出版社の引用を日本語訳。
- (11) 『中国人的性格』第四章「礼儀」pp.40, 42
- (12) 『中国人的性格』第八章「婉曲表現の才能」p.78
- (13) 『中国人的性格』第九章「従順にして頑固」p.91
- (14) 『中国人的性格』第二十四章「相互不信」pp.277-278
- (15) 『中国人的性格』第二十五章「誠実さ（信）の欠如」pp.303—304
- (16) 『中国人的性格』「序章」pp.14-15
- (17) 安岡秀夫著『小説から見た支那の民族性』聚芳閣 1926 年
- (18) 『魯迅全集』第四巻 華蓋集続編「即座支日記」七月二日 p.368
- (19) 『生ける支那の姿』内山完造著「序」p.2
- (20) 『魯迅全集』第四巻 華蓋集続編「即座支日記」七月四日 p.376
- (21) 『魯迅全集』第十五巻 pp.159-60 「書簡Ⅱ」「331027 陶亢徳への手紙」
- (22) 『中国人的性格』第十四章「保守主義」p.135
- (23) 『魯迅全集』第二巻「阿 Q 正伝」四 p.24
- (24) 『魯迅全集』第二巻「阿 Q 正伝」八 p.27
- (25) 『中国人的性格』第二十二章「日本社会における（台風）」p.246-247
- (26) 『中国人的性格』第十二章「外国人蔑視」p.112
- (27) 『中国人的性格』第十六章「肉体の強靱さ」p.165
- (28) 『中国人的性格』第十章「智的混沌」pp.100-101

- (29) 『魯迅全集』第二卷「阿Q正伝」第五章 p.116
- (30) 『魯迅全集』第二卷「阿Q正伝」第六章 pp.120-21
- (31) 『中国人的性格』第四章「正確な時間の輕視」 p.47
- (32) 『魯迅全集』第八卷「且介亭雜文・門外文談」 p.115
- (33) 『中国人的性格』第五章「正確な時間の輕視」 p.47
- (34) 『中国人的性格』第十九章「孝行」 p.199、 p.201
- (35) 『魯迅全集』第三卷「朝花夕拾・二十四孝図」 pp.119-120
- (36) 『魯迅全集』第一卷「墳・灯下漫筆」 p.281
- (37) 『魯迅全集』第九卷「集外集拾遺・古い曲はもう歌い終わった」 p.380
- (38) 『中国人的性格』第十九章「孝行」 pp.205-206
- (39) 『魯迅全集』第四卷「華蓋集・往復書簡 一」 p.33
- (40) 『魯迅全集』第四卷「華蓋集・忽然想到（六）」 p.59
- (41) 『魯迅全集』第一卷「熱風・三十八」 pp.392-393
- (42) 『中国人的性格』第二十三章「連帶責任と法に対する畏敬の念観」 p.257
- (43) 『魯迅全集』第四卷「華蓋集・ふと思いつく（七）」 p.75
- (44) 『中国人的性格』第二十四章「相互不信」 p.275
- (45) 『中国人的性格』第二十七章「中国の実情と中国に今必要なもの」 p.373